

聖書箇所：第一サムエル記 29 章 1～11 節

説教題：私が何もできなくても

1 大ピンチ！（第一サムエル記 28 章 2 節）

（1）アキシュの命令：イスラエルと戦え

ダビデは、サウルから逃れてペリシテ人の地に逃げ込みました。ペリシテ人とイスラエルは敵どうしです。そんなところで生きていくのですから大変な苦勞です。常に頭を低くし、腰を低くし、ペリシテ人のリーダーであったアキシュに懸命に仕えるしかありません。

そんなふうにして一年が過ぎました。なんとか無事に生き延びられるかもしれないと思いかけたとき、ペリシテ人とイスラエルとの間に戦争が起きてしまいます。アキシュはすぐにダビデを呼び、念を押します。「あなたと、あなたの部下は、私といっしょに出陣することになっているのを、よく承知してもらいたい。」

もしここでアキシュの命令を拒めばダビデは殺されます。いっぽう、イスラエルは自分の同胞です。イスラエルと戦うということは、自分の家族を殺すことと同じです。どうしたらよいか。ダビデは悩みます。

（2）ダビデの答え：あなたは知っておられる

悩んだすえにダビデは答えます「よろしゅうございます。このしもべが、どうするか、おわかりになるでしょう。」

不思議な言い方です。ダビデはアキシュに答えているように見えながら、それと同時に神に祈っているようなのです。「あなた（神）

は、あなたのしもべがこれからなすべきことを知っておられます。」

ダビデの祈りに対して、神はどのように答えてくださったのか。そのことをきょう見ていきます。

2 「ダビデは万を打った」

（1）ペリシテ人首長たちの怒り

アキシュがペリシテ人の首長たちの前に、ダビデを連れて来たのはよかったのですが、大きな問題を引き起こすことになりました。これから戦おうとしている相手はイスラエルです。その敵の王であるサウルの元家来であるダビデが目の前にいる。「こいつは歌にも歌われていたではないか。『サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。』今は頭を低くし、羊のように従順なそぶりを見せているけれど、何をしでかすかわからないぞ。いざとなれば自分たちを裏切り、サウルのところに寝返るのではないか。」

（2）かつて自分を苦しめた歌

ペリシテ人たちが持ち出してきた、『サウルは千を打ち、ダビデは万を打った』という歌、ダビデには苦々しい思い出があります。

ダビデがサウルの部下として働いていたときのことです。ダビデはイスラエルのために、そして自分の主人であるサウルのために、戦争となれば一生懸命働いてがんばっていました。ダビデはまだ若くてハンサム、独身、おまけに戦いにはめっぼう強い。こんな三拍

子揃った男性が現れたのですから、女性たちが放っておくはずはありません。ダビデが戦争に勝ち、凱旋行進してやってくると、町の女たちはこの歌を歌って黄色い声援を送っていたのです。『サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。』

これを聞いてへそを曲げたのはサウルです。この歌をきっかけにしてダビデに対してねたみの炎を燃やし始めます。ダビデがサウルに追われ、いのちを狙われることになったのは、もとをたどればこの歌が原因なのです。ですから、ペリシテ人の口から「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った」と聞いたとき、ダビデの頭にいやな記憶がよみがえってきました。この歌ひとつで、自分の人生が狂わされました。何度も死にかけました。すべてのものを失ってしまったのです。自分の人生をめっちゃめっちゃにした歌、ダビデはずっとそう思ってきました。

(3) その歌が自分を救う

ところが、ダビデはペリシテ人の首長たちが語ったことばを聞いて耳を疑いました。「この男は、みなか踊りながら『サウルは千を打ち、ダビデは万を打った』と言って歌っていたダビデではないか。」「こんな危険な男が自分たちのところにいるなんてとんでもない。どこか遠くのところに追い返してもらいたい。」そんなふうに騒ぎ出しているのです。結局アキシュは、しぶしぶながらダビデに引き返すように命じるほかはなくなります。このようにしてダビデは絶体絶命の大ピンチから救われました。

3 神のみわざ

(1) ダビデの告白

かつてダビデ苦しめたあの歌が、大ピンチの中にいたダビデを救ったのです。単なる偶然でしょうか。そうではないはずです。先ほど触れたように、ダビデは神に祈っていたのです。「あなた（神）は、あなたのしもべがこれからなすべきことを知っておられます。」

そうしますと、この29章に書かれていることは、すべてダビデの祈りに対する神の応答ということになります。

どんな応答だったのでしょうか。それは、ダビデのことばの中に表現されているはずです。8節。「私が何をしたというのでしょうか。私があなたに仕えた日から今日まで、このしもべに何か、あやまちがあったのでしょうか。王様の敵と戦うために私が出陣できないとは。」

神がどう答えて下さったか、ダビデのことばを見ればわかるはずでした。ところがどこにも「神」ということばがありません。ダビデは内心喜びながらも、アキシュに対してこんなふうに抗議することで、いかにもアキシュに忠実であるかのように装っている、そんなことばにしか聞こえません。どこを探せば神について語ったことばがあるのでしょうか。結論から申し上げます。驚くかもしれませんが、これでも8節はダビデの神への救いの感謝なのです。

こう言いますと、ある方は疑問に思うでしょう。どうしてダビデはストレートに神への感謝を現さないのか。それには理由があります。今ダビデはどこにいますか。ペリシテ人の地です。目の前にはアキシュがいます。ペリシテ人の首長たちが並んでいます。周りにいる人たちはみなイスラエルを憎んでいます。イスラエル人が信じている神を嫌って

います。そんな人たちの前で、自分の信仰をストレートに言えますか。言えません。もしそんなことを言ったら殺されます。

では、いっさい信仰について何も言えなかったのか。そうではない。ストレートに言うことはできなくても、ことばの端々に主への信仰を織り込むことはできました。ダビデはそうしているのです。どんなふうなのでしょう。このことを見るために、8節の前半をもう少しわかりやすく訳してみます。

「私は何をしたのでしょうか？あなたは、あなたのしもべに何を発見したのでしょうか？私があなたに仕えた日から今日まで。」

「あなた」とは誰でしょう。直接にはアキシュを指します。でもダビデはアキシュにだけ語ったのか。28章2節のときもそうでしたが、もしこれが神に語ったと考えたらどうなりますか。「あなた」を「神」「主」に置き換えて読み直してみましょう。「私は何かしたのでしょうか？主は、主のしもべに何を発見したのでしょうか？私が主に仕えた日から今日まで。」

(2) 私は何もできない

アキシュから、「おまえも一緒にイスラエルと戦うのだ」と言われたとき、ダビデはどうすることもできず、ただ神に祈ることしかありませんでした。

ダビデとは違いますが、私たちがいつかどこかで同じような経験をします。自分の手ではどうすることもできない。何もできない。そんなふうに嘆くしかない、悲しむしかない、叫ぶしかない、そんな状態に突き落とされるときがあります。そのとき私たちはどうすればいいのでしょうか。この世の人たちは言うでしょう。「あきらめなさい。」「また良い日

も来るさ。」

では、自分の愛する人を津波で一瞬にして亡くしても、そう言えるのでしょうか。あの津波が襲ってから一年が過ぎても、なお行方不明の子どもを捜している親がいます。自分がもしその親であったら、自分だって同じことをするはずです。誰がなんと言おうとあきらめることなんか絶対にできません。頭ではもう子どもは戻ってこないと知っています。でも、あきらめることができない。そのところで苦しんでいるのです、泣き叫んでいるのです。

ダビデは言いました「私は何もできなかった。」

(3) 私のうちには罪があるのに

何もできなくなっている私たちを、主はどうされるのでしょうか。私たちが苦しんでいるのを黙って冷たい視線で眺めている方なのですか。いや、「助けてください」「救ってください」と祈る私たちのことばを聞くやいなや、もうじつとしてはいられない。神である方であるのにもかかわらず、人間の姿をとられ、私たちのところへ来られ、一緒に住んでくださり、私たちの痛みと悲しみをともに味わってください、涙を流される方ではないのですか。そのようにして主であるイエス・キリストが私たちを救ってくださったのではないですか。

では、誰を救うのでしょうか。ダビデだから救われたのでしょうか。ダビデがいつも神に祈っていて、信仰者としてすばらしい歩みをしていたので、だから神は特別にダビデを救ったのでしょうか。

でも、ダビデはなんと言ったでしょう。「主は、主のしもべに何を発見しましたか？私が

主に仕えた日から今日まで。」

主はダビデの中に何を見つけたのでしょうか。何も悪いところはない。何の罪もありません。何も見つけなかった。私は神の前に正しく歩んできました。そんなことを言いたかったのですか。

反対です。ダビデは自分のことをふり返ったとき、いかに自分が汚くて、罪だらけなのかを自覚していました。罪を自覚しながら、それでも繰り返し罪を犯していった人です。私たちと変わらない弱いひとりの人間に過ぎなかったのです。だからダビデは驚いているのです。こんな罪深い自分であるのに、神はかえりみてくださり、救ってくださった。

そして言います。「王様の敵と戦うために私が出陣できないとは。」

王様の敵。言い換えれば神の敵です。いつたいなんのことでしょう。私たちを苦しめているいっさいのものです。罪ということばに集約されるすべてのものを指します。

あの百戦錬磨のダビデでさえ、罪と戦うことはできません。罪に負けました。ダビデは罪の前に無力なのです。だからダビデは出陣できない。その代わりに主が戦ってください。

どのようにして主は戦われたのでしょうか。誠に不思議な方法です。ダビデがサウルからねたまれる原因となった歌。あの歌が、ダビデを救っていく。主の御手にかかるとき、何一つ無駄なものはない。あらゆるものは益に変えられていくのです。それが主の戦いの方法です。

驚くべき主の救いのみわざに感謝する他はありません。